様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ２１６０３

研究課題名（和文）狩猟風俗から見直す「和漢」の境界の再構成

研究課題名（英文）Reconstruction of "Japanese-Chinese" Boundaries Reconsidered from Hunting Manners and Customs

研究代表者
水野　裕史（MIZUNO, Yuji）

筑波大学・芸術系・准教授

研究者番号：５０６１７０２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本課題の目的は、室町時代以来議論されてきた「中国的なもの」と「日本的なもの」の区分、すなわち「和漢」の境界を見直すことにある。その研究対象として、中央アジアから伝わった狩猟風俗を基盤に再構成を試みた。
具体的には、鷹狩図や鵜飼図などの狩猟を主題とする美術作品を対象として、それらの美術表現と図案解釈をおこなった。その結果、日本人が異国文化を認識し、それらを混淆して表現していたことを明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、「和漢」の境界に関する理解を深化させた点にある。室町時代以来の和漢の区分に関する議論に新たな視点を提供し、美術史や文化史における異文化受容と混淆の実態を明らかにすることができた。また、狩猟風俗に焦点を当てた美術作品の詳細な分析を通じて、中央アジアからの影響とその日本独自の解釈・表現方法を解明することができた。
社会的意義としては、日本人が歴史的に異文化をどのように受け入れ、独自の文化として再構築してきたかを理解することが、現代のグローバル化した社会における異文化理解や共生のあり方について重要な示唆を与えるだろう。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this project is to review the division between “Chinese things” and “Japanese things,” or the boundary between “Japanese and Chinese,” which has been debated since the Muromachi period. As the subject of this research, we have attempted to reconstruct it on the basis of hunting customs introduced from Central Asia.
Specifically, we examined the artistic expressions and design interpretations of works of art with hunting as their subject matter, such as falconry and cormorant fishing. As a result, we were able to clarify that Japanese people were aware of foreign cultures and mixed and expressed them.

研究分野：日本美術史

キーワード：鷹狩　鵜飼　オオカミ狩り　和漢　狩猟

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

これまで「和漢」の領域は、日本的な「和」と中国的な「漢」に大別され、「漢」に中央アジアや朝鮮が含まれてきた。しかし、中央アジアの歴史と文化が浮き彫りになったことで、室町時代の日本人は、中国の文化と中央アジアの文化を判別していたことが明白となった。特に、狩猟風俗に特徴的な中央アジアの文化を「韃靼人」の文化と捉え、漢民族や朝鮮民族の文化と区別して認識していたのである。本研究は、重層的な文化の集合体と考えられてきた「漢」領域から、中央アジアの領域を切り離して検討することで、新たな「和漢」の境界を斯界に訴えるものである。この成果によって、「和漢」をめぐる長年の議論を転換させ、これまでの中国主体であった日本のアジア文化の受容史に、中央アジアを加えた点で、新たな沃野を拓くことができる。
加えて、本課題は、国際的に重大な意義を持つ。それは、世界的な狩猟風俗に関する研究の潮流から判断できる。2018 年 3 月に New York University Abu Dhabi において国際会議「Raptor and falconry depictions throughout the millennia on a global scale」が開催され、また、同大学において国際的な狩猟文化研究プロジェクトも開始された。そこでは、世界中の狩猟美術に関する情報が集積されつつある。しかし、西洋を中心としたプロジェクトであり、アジア圏は加わっていない。それは、西洋と比較して、東アジアを包括した狩猟美術の研究が進んでいないことに要因がある。そのため、アジア全体を包括した研究が急務となっている。

２．研究の目的

本課題の目的は、室町時代以来議論されてきた「中国的なもの」と「日本的なもの」の区分、すなわち「和漢」の境界を見直すことにある。その研究対象として、中央アジアから伝わった狩猟風俗を基盤に再構成を試みる。これまで「中央アジア」の領域は「漢」の一部とて構成されてきたが、これを切り離して検討することで、日本人の異国に対する区別の歴史が検証できる。
和漢の境界をめぐっては、村田珠光(1422?-1502)の『心の文』の一節「この道の一大事は、和漢この境を紛らわすこと、肝要肝要」を端緒とする厚い議論がある。今日の研究では、「漢」は、中国的文化として解釈され、中央アジアや朝鮮に由来する文化は、中国の一部として我が国に伝わったと考えられている。
しかし、狩猟風俗に注目すると、日本人は、中央アジアの民族文化と漢民族文化を区別していたことが判明する。室町時代の人々は、モンゴル系民族を含むタタール人を「韃靼人」と呼称し、漢民族と別けて認識していた。また、韃靼人の狩猟風俗が描かれた絵画を「韃靼人図」と呼び、漢民族や朝鮮民族の狩猟風俗と区別して制作・鑑賞していたのである。
この現象を出発点とし、本研究は、日本人が「漢」や「韃靼」をどのように認識し、受容していたのかを追究する。その方法として、従来、重層的な文化の集合体と考えられてきた「漢」領域から、韃靼人の文化を切り離し、特にモンゴル人の国家であった「元」の文化の受容の在り方を探る。本研究は、狩猟風俗を素材に新たな「漢」の領域を設定し、「和漢」の境界を改めて構成するものである。

３．研究の方法

研究方法として、２つの調査系統を設定した。
（1）文献史料から解釈
まず、日本人が狩猟風俗をどのように認識していたのかを文献史料から導き出した。「和」の狩猟風俗を示す史料としては、建長 6 年（1254）頃に成立した橘成季編『古今著聞集』があげられる。本史料には、宮中の清涼殿の障子絵に「鷹つかひ」、つまり清涼殿に鷹狩が描かれたことが記されている。「漢」の史料としては、16 世紀中頃成立の『御座敷御かざりの事』があり、ここに「狩の躰、書申候。李安忠」と記述されている。これは、将軍が住まう東山殿に李安忠(北宋末・南宋初の絵師)様式の狩猟絵画が描かれたことを示す。これらのことから、次の二つの視点からの狩猟風俗の受容の在り方を導き出すことができる。
和･･･天皇の日常生活(儀礼)をする場である清涼殿
漢･･･将軍足利義政が日常生活をする場である東山殿
このことを手がかりに関連する文献史料から狩猟風俗の受容の在り方を追究する。

（2）東アジアの美術作品の調査
日本人が中央アジアを含む中国の狩猟風俗の様式を、どのように解釈したのか、日本側の作品と比較することで、その様態を浮かび上がらせる。具体的には高性能のカメラを使用し、高精細撮影をおこない、現代の狩猟実践者による助言を得て、そのモチーフの意味や道具の種類を特定

し、モチーフや道具から和漢の境界を追究する。
　以上、テキストとイメージの両面からの追究によって、狩猟風俗を切り口に日本人の「和漢」の認識をめぐる境界を明らかにする。

４．研究成果

　本課題の目的は、室町時代以来議論されてきた「中国的なもの」と「日本的なもの」の区分、すなわち「和漢」の境界を見直すことにある。その研究対象として、中央アジアから伝わった狩猟風俗を基盤に再構成を試みる。具体的な方法として、文献史料の調査、絵画作品の調査を中心におこなった。しかし、COVID-19 の蔓延および渡航費高騰により一部の海外調査を断念し、国内調査を充実させることで補った。
　各個人研究の成果は、以下のとおりである。

　研究代表者の水野裕史は、狩野興以「韃靼人狩猟図屏風」（福井県立美術館）、伝雲谷等顔「花見鷹狩図屏風」（MOA 美術館）、狩野探幽「鵜飼図屏風」（大倉集古館）、「鷹狩絵巻」（埼玉県立川の博物館蔵）、「鷹狩絵巻」（徳川美術館）、「鷹狩図屏風」（徳川美術館）、「鷹狩絵巻」（個人蔵）、「鵜飼図」（東京藝術大学大学美術館蔵）などの作品調査を通して、その出典となる帰属的文化についての事例研究をおこなった。事例研究では、可能な限り、高精細撮影をおこない、分担者の相馬拓也氏と現代の狩猟実践者の助言を得て、狩猟で使用する鳥類や特殊な道具を確認できた。特に次の成果を得た。
（1）鵜飼図について。中国的な鵜飼図と日本的な鵜飼図が融合された日本独自の新しい鵜飼図が制作されていたことを明らかにできた。つまり、和漢を融合させ、新しい鵜飼図として昇華させたと解釈できる。
（2）韃靼人狩猟図について。こちらも同じく和漢融合の在り方を見出すことができる。源氏物語などに見られる日本の鷹狩図の描写を採り入れ、中国由来の狩猟図とは異なる日本独自の新しい狩猟図が制作されていたことを明らかとした。
　以上の成果は、2024 年度に刊行される以下の書籍に掲載される予定である。
・『源氏絵研究の最前線』（勉誠社、2024 年 9 月発行予定）
・『鵜飼の日本史―野生と権力、表象をめぐる 1500 年』（昭和堂、2024 年 9 月発行予定）

　分担者の相馬拓也は、モンゴル、キルギス、カザフスタン、タジキスタン、ウズベキスタンを対象に、次の 2 つの調査を実践した。
（1）各国の国立博物館やミュージアムで、古代～近代まで狩猟紋様のミュージアムリサーチを集中的に実施した。また、大学・国立図書館での狩猟図・狩猟紋様のドキュメンテーションも実施した。
（2）現在も実践される、オオカミ狩りや騎馬鷹狩猟への同行や、カザフやキルギスでの鷹匠宅への訪問による飼育現場の訪問、ハンター(n=25)からのオーラルヒストリーの収集などのエスノグラフィ調査を通じて、図案解釈に体感値を統合するスキーム構築を行った。さらに、キルギスとモンゴルでは、実際の現役ハンターに狩猟紋様やその様子を見せて、実践者の意見を反映させる「アクター統合型アクションリサーチ」の手法を導入し、美術表現と図案解釈に新たな視点の開拓を模索した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 水野裕史	４．巻 -
２．論文標題 小画面から大画面へ―行幸を題材に	５．発行年 2024年
３．雑誌名 開館40周年記念源氏物語 THE TALE OF GENJI ―「源氏文化」の拡がり　絵画、工芸から現代アートまで―	６．最初と最後の頁 166-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 相馬拓也	４．巻 47巻7号
２．論文標題 イヌワシを駆る悠久の奥義《騎馬鷹狩猟》	５．発行年 2023年
３．雑誌名 月刊みんぱく2023年7月号（特集「ハンターと文明」）	６．最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 水野裕史	４．巻 538
２．論文標題 描かれた鵜ー日本の鵜飼美術	５．発行年 2022年
３．雑誌名 月刊みんぱく	６．最初と最後の頁 7-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 相馬拓也	４．巻 37
２．論文標題 ユキヒョウとモンゴル遊牧民、狩りと畏れのフォークロア	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ビオストーリー	６．最初と最後の頁 66-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 相馬拓也	4．巻 18(1)
2．論文標題 アルタイ山脈に美しき聖獣ユキヒョウの《聖》と《死》を探る	5．発行年 2023年
3．雑誌名 E-Journal GEO	6．最初と最後の頁 54-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Mizuno Yuji	4．巻 13
2．論文標題 Twelve Bronze Goshawks	5．発行年 2021年
3．雑誌名 International Journal of Falconry	6．最初と最後の頁 56-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 相馬 拓也	4．巻 37
2．論文標題 ユキヒョウとモンゴル遊牧民、狩りと畏れのフォークロア	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ビオストーリー	6．最初と最後の頁 66-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Mizuno Yuji	4．巻 5
2．論文標題 Implication of Japanese Hawks and Falconry Art	5．発行年 2021年
3．雑誌名 The Journal of Hawks, Hawking Grounds, and Environment Studies	6．最初と最後の頁 119-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 水野裕史	4．巻 36
2．論文標題 豊臣秀吉「大鷹野」と鷹狩図屏風	5．発行年 2019年
3．雑誌名 鹿島美術財団年報	6．最初と最後の頁 236-245
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 水野裕史	4．巻 54
2．論文標題 日本美術に現れた鳥獣表象―鷹を中心に―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ヒトと動物の関係学会誌	6．最初と最後の頁 22-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　6件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 水野裕史
2．発表標題 美術作品に見る「鵜鷹逍遙」
3．学会等名 鵜飼研究会
4．発表年 2022年

1．発表者名 相馬拓也
2．発表標題 草原シルクロードの民族どうぶつ学フィールドノート
3．学会等名 日本文化人類学会 第56回学術大会
4．発表年 2022年

１．発表者名 相馬拓也
２．発表標題 シルクロード遊牧民の奥義、イヌワシ飼育の知と技法おしえます！
３．学会等名 鏡プロジェクト（京都大学創立125周年記念イベント）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 相馬拓也
２．発表標題 映画『白い豹の影』作品世界イントロダクション：野生動物をめぐる聖と死，中央アジア今昔映画祭ステージトーク
３．学会等名 渋谷ユーロスペース（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 相馬拓也
２．発表標題 Re-considering Human & Animal Well-Being from the Steppe Silk Road
３．学会等名 早稲田大学高等研究所15周年記念シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 相馬拓也
２．発表標題 シルクロードの人類と動物の3000年史―《聖性》と《死性》入り混じる動物観を探る
３．学会等名 NHK文化センター寄付講座：世界の“不思議”に迫る！京大「白眉」研究者たち（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 水野 裕史
２．発表標題 絵画から読み解く大名と鳥
３．学会等名 肥後細川庭園 庭Cafeトーク（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 相馬 拓也
２．発表標題 ヒトと野生動物のシルクロード、知られざる“動物秘話”教えます！
３．学会等名 京大サマープログラム2021（京都大学高大連携事業）
４．発表年 2021年

１．発表者名 相馬 拓也
２．発表標題 シルクロードに伝わる秘技、騎馬鷹狩文化の起源を求めて
３．学会等名 筑波大学「中央ユーラシアと日本の未来」第32回講演
４．発表年 2021年

１．発表者名 水野 裕史
２．発表標題 源氏絵から転用された図様―鷹狩を中心に
３．学会等名 シンポジウム「桃山・江戸時代源氏絵研究の最前線―図様の継承と創造」
４．発表年 2021年

１．発表者名 相馬 拓也
２．発表標題 地理学者が挑む野生動物と人類の調和社会の実現
３．学会等名 名古屋大学環境学研究科令和元年度人文地理学セミナー（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計3件

１．著者名 相馬 拓也	４．発行年 2022年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 360
３．書名 草原の掟: 西部モンゴル遊牧社会における生存戦略のエスノグラフィ	

１．著者名 福田千鶴、武井弘一	４．発行年 2021年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 368
３．書名 鷹狩の日本史	

１．著者名 Oliver Grimm, Karl-Heinz Gersmann	４．発行年 2020年
２．出版社 Wachholtz Verlag GmbH	５．総ページ数 1056
３．書名 Raptor on the fist: falconry, its imagery and similar motifs throughout the millennia on a global scale	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	相馬　拓也 (SOMA Takuya) (60779114)	京都大学・白眉センター・特定准教授 (14301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関